

平成17年度（第49回）
岩手県教育研究発表会発表資料

特別支援教育

肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間における コミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する研究

—一人一人に応じた代替コミュニケーション手段の活用をとおして—

平成 18 年 1 月 12 日
長期 研 修 生
所属校 岩手県立盛岡養護学校
氏 名 菊 池 裕 志

< 目 次 >

I	研究目的	1
II	研究仮説	1
III	研究の内容と方法	1
	1 研究の内容と方法	1
	2 授業実践の対象	2
IV	研究結果の分析と考察	2
	1 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する基本構想	2
	(1) 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の基本的な考え方	2
	(2) 代替コミュニケーション手段を活用したコミュニケーション能力を育む指導の展開	3
	(3) 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する基本構想図	5
	2 基本構想に基づく実態調査及び調査結果の分析と考察	5
	(1) 実態調査の目的	5
	(2) 調査結果の分析と考察	5
	3 基本構想に基づく手だての試案	6
	(1) 手だての試案	6
	(2) 検証計画	9
	4 授業実践及び実践結果の分析と考察	9
	(1) 手だての試案を取り入れた授業実践の概要	9
	(2) 手だての試案に基づく授業実践及び実践結果の分析と考察	9
	5 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方のまとめ	20
V	研究のまとめと今後の課題	20
	1 研究のまとめ	20
	2 今後の課題	21

<おわりに>

【引用文献】

【参考文献】

【参考URL】

I 研究目的

肢体不自由養護学校の高等部では卒業後の生活に向けて、自己のもつ能力や可能性を最大限に発揮し、社会自立できるように指導することが望まれている。そのため、自立活動の時間において、社会自立を可能にする基盤を培うために、障害の状態に応じたコミュニケーション手段を活用し、主体的に人とかかわることができるように指導を行うことが求められている。

しかし、肢体不自由養護学校高等部の生徒の実態を見ると、コミュニケーションを円滑に行うことに困難を示す生徒が多くみられる。これは、口腔機能や運動機能の状態により、伝えたい意思はあるものの、うまく伝わらないことが要因として考えられる。

このような状況を改善するためには、自分の考えや気持ちを適切なコミュニケーション手段を用いて相手に伝えられるようになることが大切である。そのためには、情報機器やシンボル等の代替コミュニケーション手段を生徒一人一人の実態に応じて選択し、生徒が活用できるように指導を工夫することが必要である。

そこで、この研究は、社会自立を目指す肢体不自由養護学校の高等部の生徒に対し、自立活動の時間において、一人一人に応じた代替コミュニケーション手段の活用をとおして、コミュニケーション能力を育む指導の在り方を明らかにし、自立活動の指導の充実に役立てようとするものである。

II 研究仮説

肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間のコミュニケーションに関する指導において、次のような手だてを講じることにより、生徒のコミュニケーション能力を育む指導を充実させることができるであろう。

- 1 受信・発信を補助する手段を選択するためのシートを作成し、一人一人に応じた代替コミュニケーション手段を選択する。
- 2 代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開を工夫する。

III 研究の内容と方法

1 研究の内容と方法

- (1) 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する基本構想の立案（文献法）

肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方についての基本的な考え方をまとめるとともに、一人一人に応じた代替コミュニケーション手段を活用することの意義を明らかにし、肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する基本構想を立案する。

- (2) 基本構想に基づく実態調査及び調査結果の分析と考察（面接法）

基本構想に基づいて、調査対象となる生徒のコミュニケーションに関する指導の際の様子について実態調査を行い、その調査結果の分析と考察から、手だての試案作成に必要な資料を得る。

- (3) 基本構想に基づく手だての試案作成（文献法）

基本構想に基づいて、肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方についての手だての試案を作成する。

- (4) 授業実践及び実践結果の分析と考察（授業実践、面接法、質問紙法）
手だての試案に基づいて授業実践を行うとともに、実践結果の分析と考察を行う。
- (5) 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方についての研究のまとめ
授業実践の結果から、肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方についてまとめる。

2 授業実践の対象

岩手県立盛岡養護学校高等部第1学年「自立活動」Aグループ（男子1名 女子1名 計2名）

IV 研究結果の分析と考察

1 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する基本構想

- (1) 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の基本的な考え方

ア 肢体不自由養護学校の今日的な動向について

肢体不自由養護学校においては、障害に起因する発声・発語器官の制約や手指、上・下肢、体幹の運動・動作の制約により、音声言語や文字言語、身体表現などを用いて発信することに困難を抱える児童生徒が多い。そのため、表情や身振り、しぐさなどから意図を理解できる身近な相手や、家庭や学級などの慣れている場面においてはコミュニケーションを行うことができるが、相手や場面が変わるとコミュニケーションが行えなくなる児童生徒も多くみられる。

また、文部科学省の調査「学校数・児童生徒数等の概要」によると、平成15年度の肢体不自由養護学校における重複障害学級在籍率は小・中学部で74.8%、高等部では60.8%となっている。この数値を平成2年度の調査結果と比較するとそれぞれ14.9%、28.5%上昇しており、障害の重度・重複化にともないコミュニケーションを行うことに困難を抱える児童生徒が増加傾向にある。

このような状況の中で、特にも高等部の生徒に対しては卒業後の生活の中で様々な相手や場面に応じて考えや気持ちを受信・発信することができるように、コミュニケーションに関する指導を行うことが必要であると考えられる。

イ コミュニケーション能力とは

「盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説—自立活動編—」には、自立活動におけるコミュニケーションに関する内容について、『5コミュニケーション』では、場や相手に応じて、コミュニケーションを円滑に行うことができるように」と記述されている。

そこで、【表1】に示すとおり、本研究では育成するコミュニケーション能力を「受信・発信する力」と「相手や場面に応じてかかわる力」ととらえた。すなわち、「受信・発信する力」とは、コミュニケーションを行う相手と相互に考えや気持ちを伝え合うことができる力のことである。「相手や場面に応じてかかわる力」とは、相手や場面の変化に応じながら人とかかわ

【表1】コミュニケーション能力について

コミュニケーション能力	意味
受信・発信する力	相手の考えや気持ちを理解したり、自分の考えや気持ちを伝えたりする力
相手や場面に応じてかかわる力	様々な相手や場面に応じて人とかかわることができる力

ることができる力のことである。これら二つの力が、代替コミュニケーション手段を活用したコミュニケーション能力を育む指導をとおして高められると考える。

ウ 代替コミュニケーション手段とは

吉川（2004）は「様々なコミュニケーション手段は、補助的な手段を用いるかどうかによって補助系と非補助系に分けられ、更に音声が出されるかどうかによって音声系と非音声系に分けられる」と述べている。このことを参考に

【表2】代替コミュニケーション手段の分類

	音声を表出する	音声を表出しない
機器を使用する	PC、VOCA	実物、写真、絵、シンボル、文字言語
機器を使用しない	音声言語	接触運動、表情、視線、身振り、指差し、手話

【表2】に示すように、代替コミュニケーション

手段を機器の使用の有無と音声表出の有無により四つに分類した。児童生徒が視線や身振り、絵や写真、VOCA（Voice Output Communication Aid：携帯用会話補助装置）やPC（Personal Computer：パソコン）などの代替コミュニケーション手段を活用することでコミュニケーションを行う際の困難さを軽減できるものとする。

エ 代替コミュニケーション手段を活用することの意義

肢体不自由養護学校では、互いに考えや気持ちを伝え合うことや様々な相手や場面に応じて人とかわることに困難さを抱えている児童生徒の指導において、「いかに子どもが受信しやすく発信するか」「いかに子どもの発信を確実に受信するか」といった点で困難さを抱えている教師が少なくない。これは、現在子どもがもち合わせているコミュニケーション手段だけでは、相互に考えや気持ちをやりとりすることに難しさがあるためと考える。

したがって、児童生徒が代替コミュニケーション手段を活用することにより、相互に考えや気持ちを理解したり、伝えたりすることが容易になり、コミュニケーションを行うことのできる相手や場面を広げることができるものとする。

このことから、代替コミュニケーション手段を活用したコミュニケーション能力を育む指導を行うことは価値があるとする。

(2) 代替コミュニケーション手段を活用したコミュニケーション能力を育む指導の展開

ア 実態把握について

コミュニケーション能力を育む指導において、代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開を工夫するためには、児童生徒の現在の受信・発信の状況や人とかわる際の様子について実態把握することが必要であるとする。

そこで、現在の受信・発信の状況を実態把握するためには、受信面では感覚刺激、表情やまなざし、実物や写真、シンボルや文字などによる働きかけに対する反応や理解といった認知・言語理解面から実態把握を行い「どのような働きかけを理解することができるのか」とらえる必要がある。発信面では身体の様子や上・下肢の動き、手指の巧緻性など運動・動作面から実態把握を行い「どのような伝え方をすることができるのか」とらえる必要がある。

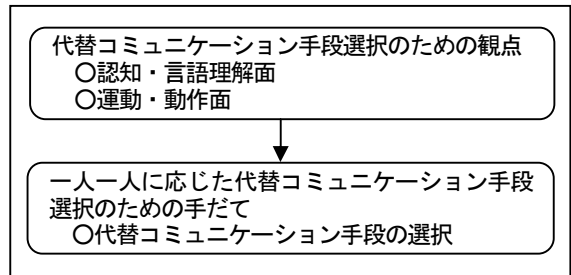
また、人とかわる際の様子を実態把握するためには「選択」、「要求」、「相互伝達」をするときのコミュニケーションの様子や、「個別」、「集団」、「校外」の場面における受信・発信の状況などから実態把握を行い「コミュニケーションを行う上で何を課題としているのか」とらえる必要がある。

イ 代替コミュニケーション手段の選択について

肢体不自由養護学校の児童生徒は、認知・言語理解面や運動・動作面において多様な障害の状態を示すため、教師は一人一人に応じた適切な代替コミュニケーション手段を選択することが困難であると考えます。

そこで、一人一人に応じた代替コミュニケーション手段を選択するためには、前述の実態把握を基に【図1】

に示すように、適切な代替コミュニケーション手段を選択することができる手だてを作成し活用することが必要であると考えます。



【図1】代替コミュニケーション手段の選択の流れ

ウ 代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開の工夫について

代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開の工夫において、受信・発信する力にかかわる指導の段階を【表3】に示すとおり「選択」「要求」「相互伝達」の三つの段階として考えた。

「選択」の段階では、実物、絵、写真、音声言語などの代替コミュニケーション手段を活用し、身体への直接的な働きかけや視覚的な働きかけ、言語的な働きかけに応じて好きなものを選択するなどの指導を行うことにより「受信する力」が高まるものと考えます。

「要求」の段階では、VOCAやPC、写真や身振りなどの代替コミュニケーション手段を活用し、物や活動、許可や援助の要求をするなどの指導を行うことで「発信する力」が高まるものと考えます。

「相互伝達」の段階では、様々な代替コミュニケーション手段を活用し、質問や返答、会話など、相互的なやりとりが必要とされる指導を行うことにより「受信する力」と「発信する力」が高まるものと考えます。

また、相手や場面に応じてかかわる力に関して、指導の場面を【表4】に示すとおり「個別」「集団」「校外」の三つの場面として考えた。

代替コミュニケーション手段を活用して「個別」の場面から「集団」の場面へ、「集団」の場面から「校外」の場面へと指導の場面を広げることにより様々な相手や場面に応じて人とかかわることができる力を高めることができるものと考えます。

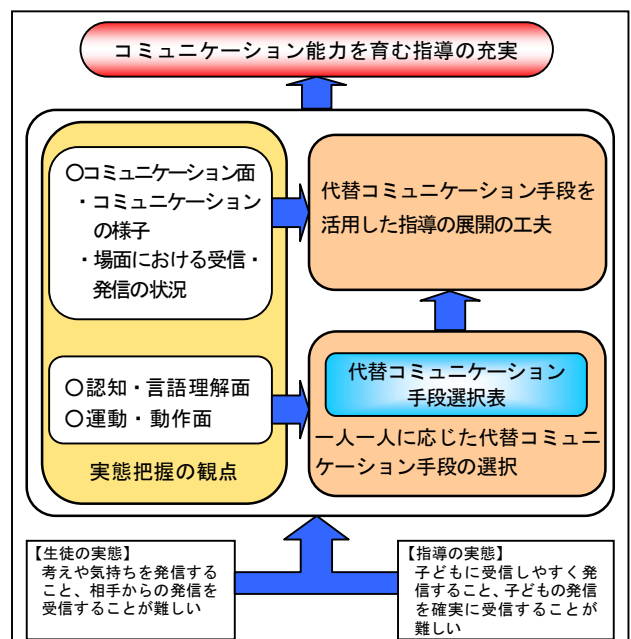
さらに、指導の展開の工夫においては指導の段階や指導の場面、生徒の興味・関心に応じた指導内容の設定、教材・教具の工夫など児童生徒が代替コミ

【表3】指導の段階

段階	内容	高まる力
選 択	相手からの視覚的、言語的な働きかけに応じて好きなものを選択する段階	受 信
要 求	相手に物や援助、活動を要求する段階	発 信
相互伝達	あいさつや応答、質問や返答など、相手と考えや気持ちを伝達し合う段階	受信・発信

【表4】指導の場面

場 面	内 容
個 別	身近な大人や、慣れている場面でのコミュニケーション
集 団	友達や、集団で学習する場面でのコミュニケーション
校 外	初対面の相手や、校外の場面でのコミュニケーション



【図2】肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する基本構想図

コミュニケーション手段を活用できるように工夫する必要があると考える。

(3) 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する基本構想図

これまで述べてきたことを基に、肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する基本構想図を前頁の【図2】に示す。

2 基本構想に基づく実態調査及び調査結果の分析と考察

(1) 実態調査の目的

肢体不自由養護学校高等部の自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導に必要な資料を得るために、本研究の対象児であるA児及びB児の担任に対して聞き取り調査を行った。

(2) 調査結果の分析と考察

調査結果の分析と考察は【表5】に示すとおりである。

【表5】聞き取り調査の結果及び分析と考察

調査項目		A 児	B 児
現在の障害	調査結果	<ul style="list-style-type: none"> 両上肢機能障害及び移動機能障害、言語機能障害、知的障害 	<ul style="list-style-type: none"> 両上肢、下肢の機能障害（特に右側に障害あり）、言語機能障害
	分析と考察	<ul style="list-style-type: none"> 両上肢機能障害、言語機能障害及び知的障害により、動作や音声言語によって考えや気持ちを伝えること、相手からの働きかけを理解することに困難さがあると思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> 両上肢、下肢の機能障害、言語機能障害により、動作や音声言語によって考えや気持ちを伝えることに困難さがあると思われる。
現在のコミュニケーション手段	調査結果	<ul style="list-style-type: none"> 発信手段：「うん」、「あい」、「出た」、「まんま」の言葉、表情、身振り 受信手段：実物、カード、身近な言葉 	<ul style="list-style-type: none"> 発信手段：VOCA（トーキングエイド）、PC、サイン、身振り、表情 受信手段：言葉、文字
	分析と考察	<ul style="list-style-type: none"> いくつかの言葉と表情、身振りによって伝えることができ、興味・関心のある実物やカード、身近な言葉などを理解することができる。しかし、A児の現在のコミュニケーション手段では、伝えること、理解することのできる内容は限られている。そこで、新たな代替コミュニケーション手段を獲得し、伝えること、理解することのできる内容を増やすことが必要であると思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> トーキングエイドやPC、サイン、身振り、表情などで考えや気持ちを伝え、言葉や文字を理解することができる。しかし、上肢にまひがあるため、トーキングエイドやPCなどの機器の操作において困難さがある。そこで、機器の様々な機能を使い、色々な表現ができるようになることが必要であると思われる。
コミュニケーションに関する指導内容	調査結果	<ul style="list-style-type: none"> 選択肢（実物、カード、言葉による二者択一、ときとして三者択一）の中から選んで表現 	<ul style="list-style-type: none"> トーキングエイドの使い方 サイン（トイレ）の獲得
	分析と考察	<ul style="list-style-type: none"> 様々な代替コミュニケーション手段を選択肢として用いて選び、表現する指導が行われている。このことから、A児が、教師からの働きかけを確実に理解できるようになることと、自ら選択したものを確実に伝えられるようになることを目指してコミュニケーションの指導が行われていると思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> トーキングエイドやサインを使うことができるように指導が行われている。このことからB児が自らの考えや気持ちを十分に表現できるようになることを目指してコミュニケーションの指導が行われていると思われる。
コミュニケーションの際の子どもの様子に関する指導	調査結果	<ul style="list-style-type: none"> ほめられると喜びを感じ、更にながらうとする様子が見られる。 発語に限られており、左まひ、かつ右手の微細な動きができないため、言葉や動作で考えや気持ちを伝えることに困難さがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 5月中旬より自ら思いをトーキングエイドで伝えることができるようになってきた。
	分析と考察	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションの意欲はあるが、言葉や動作で伝えることに困難さがある。このことから、右手の動きを生かして、VOCAなどを操作し伝えることができるように、プッシュスイッチをA児が使いやすい大きさに調整する必要があると思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> トーキングエイドを使い始め、便利さや有効性を感じ、周囲の人とのかかわりに対して意欲が育まれてきている。このことから、集団や校外での学習場面においても代替コミュニケーション手段を活用し、人とかかわることができるように指導を行うことが必要であると思われる。
コミュニケーションにおける課題に関する指導	調査結果	<ul style="list-style-type: none"> 確実に意思疎通ができるように、選択肢から選んだり表現したりするなど、やりとりに関する指導を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> VOCAやサインなどを使って、考えや気持ちのやりとりができるように様々な機器の活用方法を探したり試みたりしている。
	分析と考察	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションの指導において、相手からの働きかけを理解し自分の考えや気持ちを確実に伝えることについて課題があると考えられる。このことから、A児が代替コミュニケーション手段を活用できるように、指導の展開を工夫する必要があると思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションの指導において、代替コミュニケーション手段の活用の仕方について課題があると考えられる。このことから、B児が代替コミュニケーション手段を活用できるように、指導の展開を工夫する必要があると思われる。

3 基本構想に基づく手だての試案

(1) 手だての試案

基本構想及び実態調査の結果から明らかになった点を踏まえ手だての試案を作成した。

ア 実態把握に関する手だて

一人一人に応じた代替コミュニケーション手段を選択し、代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開を工夫するためには、実態把握の観点と項目に基づいて実態把握をする必要があると考え【表6】に示すような「実態把握のためのシート」を作成した。

「実態把握のためのシート」には、代替コミュニケーション手段選択のための観点として「認知・言語理解面」と「運動・動作面」を設定し、指導の展開を工夫するための観点として「コミュニケーション面」を設定した。

「認知・言語理解面」では、子どもの受信面の実態を把握するために、感覚的な刺激、具体物や半具体物、文字言語、音声言語の働きかけに対する反応や理解について項目を設定した。

「運動・動作面」では、子どもの発信面の実態を把握するために意図的に動かすことのできる身体部位や、上・下肢の動き、手指の巧緻性について項目を設定した。

認知・言語理解面と運動・動作面の各項目では、確実にできるものには◎、確実にではないができるものには○を（ ）の中に記入する。各項目の中の並びは左から右

に向けて段階順に並んでおり、これによって生徒の認知・言語理解面の上限と、運動・動作面の上限を把握することができる。また、具体的な様子について「実態の状況」に記入することにより一人一人に応じた代替コミュニケーション手段を選択することができる。と考える。

「コミュニケーション面」では、様々な相手や場面に応じて人とかかわる際の実態を把握するために、コミュニケーションの様子として選択、要求、相互伝達の様子と、場面における受信・発信の状況として個別、集団、校外の項目を設定した。コミュニケーション面では、それぞれの項目の（ ）の中に◎や○を記入し、具体的な様子について「実態の状況」に記入することで指導のねらいや題材を設定することができる。と考える。

【表6】「実態把握のためのシート」

観 点		項 目 () 内にチェック◎/○		実態の状況
代替 コミュニケーション 手段 選択 のための 観点	認知・言語理解面	働きかけへの反応	感覚刺激に対する反応〈抱っこ()、揺さぶり()〉 表情()、まなざし()、身振り()	
		具体物・半具体物の理解	実物()、写真()、絵() シンボル()、サイン()	
		文字言語の理解	ひらがな() 漢字交じり文()	
	運動・動作面	音声言語の理解	単語() 短文() 会話()	
		身体の様子	微細な動き〈筋肉()、呼吸()、まばたき()、眼の動き()〉 意図的に動かせる部分〈視線()、口()、頭部()、寝返り()〉	
		上・下肢の動き	上・下肢〈手足を伸ばす()、大きいボタンを押す()〉 手の大まかな操作〈押す()、握る()、離す()、つかむ()、引っ張る()〉	
	手指の巧緻性	指の操作〈つまむ()、指先で押す()〉 指の細かな操作〈小さな物をつまむ()、ボタン操作()〉		
指導の 展開を 工夫する ための 観点	コミュニケーションの様子	選択	快・不快の表出をする() 二つの中から一つを選ぶ() 三つ以上の中から一つを選ぶ()	
		要求	物の要求をする() 活動の要求をする() 許可の要求をする() 援助の要求をする()	
		相互伝達	あいさつ・応答をする() 質問・返答をする() 会話をする()	
	場面における受信・発信の状況	個別	身近な相手/慣れている場面()	
		集団	友達/集団活動場面()	
		校外	初対面の相手/慣れていない場面()	

チェック ◎…確実にできるもの
○…確実にではないができるもの

イ 代替コミュニケーション手段の選択に関する手だて

コミュニケーション能力を育む指導を行う上で、子どもの実態に応じた適切な代替コミュニケーション手段を選択することができるように、【図3】に示すような「代替コミュニケーション手段選択表」を作成した。(表中の各手段の詳細については、巻末の【参考URL】を参照のこと)

「代替コミュニケーション手段選択表」の縦軸と横軸の各項目は「実態把握のためのシート」の運動・動作面と認知・言語理解面の各項目と対応させている。このことにより、子どもの実態に合わせて代替コミュニケーション手段を選択できるようにした。

縦軸には、運動・動作面として、様々な機器操作の可能性をとらえるために体のわずかな動きから手指を使った細かな操作までの項目を設定し上から順に配列した。

横軸には、どのような働きかけを理解することができるのかをとらえるために感覚刺激に対する反応の有無から文字言語の理解までの項目を設定し左から順に配列した。

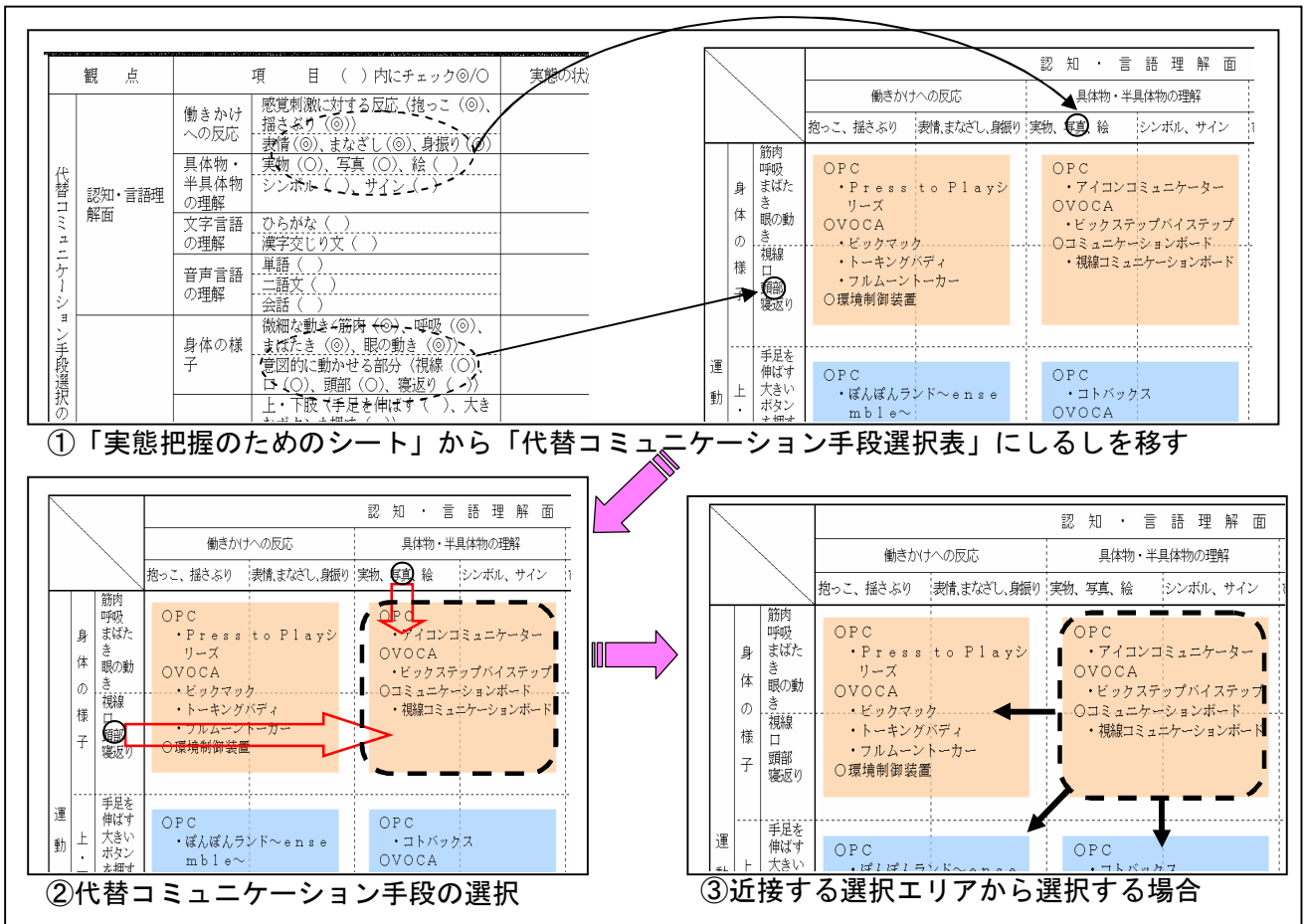
		認知・言語理解面						スイッチ・入力装置
		働きかけへの反応		具体物・半具体物の理解		文字言語の理解		
		抱っこ、揺さぶり	表情、まなざし、身振り	実物、写真、絵	シンボル、サイン	ひらがな	漢字交じり文	
運動・動作面	身体の様子	<input type="radio"/> PC ・Press to Playシリーズ <input type="radio"/> VOCA ・ゼックマック ・トーキングボディ ・フルムントーカー <input type="radio"/> 環境制御装置		<input type="radio"/> PC ・アイコンコミュニケーター <input type="radio"/> VOCA ・ビクステップバイステップ <input checked="" type="radio"/> コミュニケーションボード ・視線コミュニケーションボード		<input type="radio"/> PC ・トーキングパートナー <input type="radio"/> VOCA ・ステップバイステップWithレベル <input type="radio"/> コミュニケーションボード ・50音表 ・単語表		筋電スイッチ 呼吸スイッチ まばたきスイッチ 眼電スイッチ
	上・下肢の動き	<input type="radio"/> PC ・ぼんぼんランド～ense mble～ <input type="radio"/> VOCA ・リドルマック ・アイトーク ・パートナーズワン		<input type="radio"/> PC ・コトボックス <input type="radio"/> VOCA ・ゴートーク4 <input checked="" type="radio"/> 写真、絵、シンボルなどのカード <input type="radio"/> ジェスチャー <input type="radio"/> コンパートメントコミュニケーター		<input type="radio"/> PC ・ディスカバースイッチ <input type="radio"/> VOCA ・レッツ・チャット ・VOCAプラグス2 <input type="radio"/> 文字盤		センサースイッチ ブッシュスイッチ(大) ブッシュスイッチ 握りスイッチ 棒状スイッチ ひもスイッチ トラックボール
	手指の巧緻性	<input type="radio"/> PC ・ステップタッチ <input type="radio"/> VOCA ・ウェストポーチメッセージ ・パートナーズワン <input type="radio"/> ボイスメモ		<input type="radio"/> PC ・ヒロキII <input type="radio"/> VOCA ・メッセージメイト ・トータラックウィズレベル <input type="radio"/> コミュニケーションブック		<input type="radio"/> PC ・ハーティリーダー ・ディスカバーキネックス <input type="radio"/> VOCA ・トーキングエイド ・ダイナモ <input type="radio"/> 筆談器		マウス タッチパネルディスプレイ 大型キーボード リモコン(大) キーボード リモコン

【図3】「代替コミュニケーション手段選択表」

「代替コミュニケーション手段選択表」の使い方については、以下のとおりである。(次頁【図4】参照)

- ① 「実態把握のためのシート」で明らかになった運動・動作面と認知・言語理解面の上限の◎や○を「代替コミュニケーション手段選択表」の縦軸と横軸に書き移す。
- ② 「代替コミュニケーション手段選択表」にしるしを付け終えたら、縦軸の下端のしるしと横軸の右端のしるしから線を伸ばし、交差する部分と重なった色の付いた部分(選択エリア)から、代替コミュニケーション手段の候補を選択する。
- ③ 指導の段階や場面によっては、実態から導き出した代替コミュニケーション手段だけではなく、近接する選択エリアから代替コミュニケーション手段を選択する場合もあることとする。

なお、音声言語の実態把握の結果については代替コミュニケーション手段を選択する上での手がかりとしては活用せず、問いかけに対する反応などを指導の際の手がかりとして活用する。



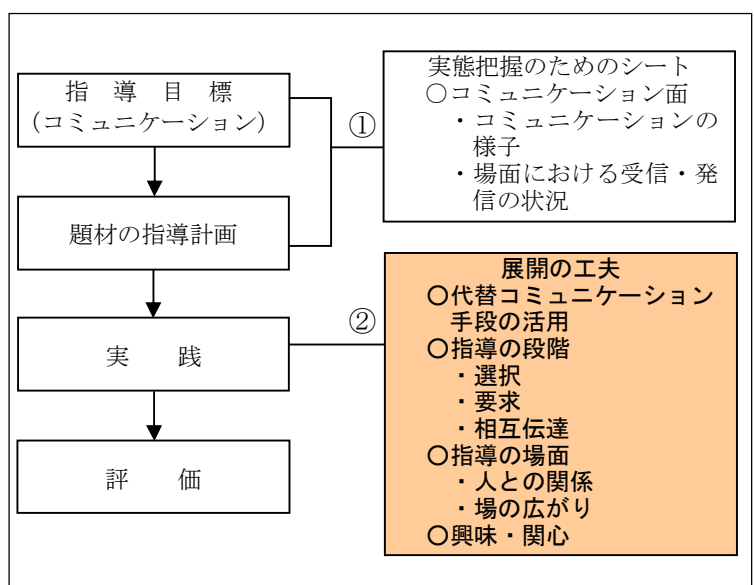
【図4】「代替コミュニケーション手段選択表」の使い方

ウ 代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開の工夫に関する手だて

コミュニケーション能力を育む指導を行う上で、代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開を工夫するには、【図5】に示すような流れに沿って指導を行うこととする。

最初に、「実態把握のためのシート」の「コミュニケーション面」にある「選択」、「要求」、「相互伝達」、「個別」、「集団」、「校外」の各項目を参考にし、指導目標と題材の指導計画を設定する。

次に、現在の生徒のコミュニケーションにおける指導の段階や指導の場面についての考慮をする。指導の段階によっては、身体への直接的な働きかけや視覚的な働きかけを行うなど子どもの実態に応じて働きかけに配慮することや、見通しをもって授業に取り組むことができるように題材の中で一単位時間毎の授業の流



【図5】代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開の工夫の流れ

れを一定にすることなどの工夫が必要であると考え。指導の場面によっては、子どもが集中して学習に取り組むことができるように一对一の学習場面を設定したり、教師との一对一の学習場面から、集団での学習場面、校外での学習場面へと指導の場を広げたりする工夫が必要であると考え。

また、生徒の興味・関心に応じて指導内容を設定することや障害の状態に応じて必要な教材の準備を行うことも指導の展開を工夫する上で必要であると考え。さらに、子どもがもう少しでできそうなところを指導上の課題として設定することや子どもが緊張を感じずに学習に取り組むことができるようにかかわり方に配慮することなど、スモールステップを組みながら指導の展開を工夫することにより、段階的に生徒のコミュニケーション能力を育むことができると考える。

(2) 検証計画

肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の手だての試案の有効性について、【表7】の検証計画に基づいて検証する。検証に当たっては、ビデオと教師の記録、生徒の活動の分析、事後実施するアンケートからの分析を基にコミュニケーション能力の育成状況について分析・考察を行う。

【表7】検証計画の概要

検証項目	検証内容	検証方法	処理・解釈の方法
コミュニケーション能力の育成状況	・受信・発信する力 ・相手や場面に応じてかわる力	○観察法 ・生徒の学習過程における活動の様子の観察 ・授業実践時のビデオ記録	・ビデオと教師の記録から分析・考察する。
		○面接法 ・授業実践後の担任からの感想	・感想の内容から分析・考察する。
		○質問紙法 ・事後実施するアンケートからの分析	・評価の観点に応じて生徒の記述を分析する。

4 授業実践及び実践結果の分析と考察

(1) 手だての試案を取り入れた授業実践の概要

ア 授業実践の期間 平成17年9月26日～10月12日

イ 題材の指導計画

題材名「好きな活動を選ぼう」(A児、全8時間)

題材名「お店の人と話してみよう」(B児、全7時間)

(2) 手だての試案に基づく授業実践及び実践結果の分析と考察

手だての試案に基づいて作成した「実態把握のためのシート」と「代替コミュニケーション手段選択表」を基に授業実践を行った。

また、検証計画に基づき、A児及びB児のコミュニケーション能力の育成状況について、学習過程における生徒の活動の様子、アンケート記述、授業後の担任からの感想を基に分析と考察を行った。

ア A児の授業実践及び実践結果の分析と考察

(ア) 「実態把握のためのシート」の活用

「実態把握のためのシート」を活用した結果は、次頁【表8】に示すとおりである。

(イ) 「代替コミュニケーション手段選択表」の活用

「実態把握のためのシート」に基づいて、A児の代替コミュニケーション手段の選択を行った。A児の実態から「周囲の人に自ら選択したことを確実に伝えること」が大切であると考え、

A児の代替コミュニケーション手段を【図6】に示すようにリトルマック（一つのメッセージを表出できる音声代替装置）と写真を選択した。スイッチ・入力装置についてはプッシュスイッチを選択し、リトルマックに接続して押しやすいように配慮をした。

本来ならば、選択エリアからはVOCAとしてゴートーク4を選択するところである。しかし、「実態把握のためのシート」のコミュニケーション面の「興味のあるものに手を伸ばす、複数の選択肢の中から一つを選ぶのは不確実である」という、選択における指導の段階を考慮し、代替コミュニケーション手段としては、四つのボタンに貼り付けた写真や絵の中から伝える内容を選択するゴートーク4より、一つのボタンを押すことで音声を表出することができるリトルマックが適切であると考え、近接する選択エリアからリトルマックを選択した。

(ウ) A児の指導計画

「実態把握のためのシート」に基づいてA児の代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開の工夫を行った。

「実態把握のためのシート」から確実に二つの中から一つを選ぶことと、確実に要求を伝えられるようになることをねらいとして設定した。

また、研究担当者と一対一で授業に取り組みリトルマックの使い方について習得を図ることができるように指導場面を個別とした。さらに、A児の興味・関心から体を動かさずランコやランポリンなどの遊びと

【表8】「実態把握のためのシート」(A児)

観 点	項 目 () 内にチェック◎/○	実態の状況	
代替コミュニケーション手段選択のための観点 認知・言語理解面	感覚刺激に対する反応(抱っこへの反応)	感覚刺激に対して、音声表出や身振りで快・不快を表現できる。教師の表情や身振りを見て、だいたいの意図をくむことができる。	
	具体物・半具体物の理解	実物(○)、写真(○)、絵()、シンボル()、サイン()	
	文字言語の理解	ひらがな()、漢字交じり文()	
	音声言語の理解	単語(○)、二語文(○)、会話()	
運動・動作面	身体の様子	微細な動き(筋肉(◎)、呼吸(◎)、まばたき(◎)、目の動き(◎)、意図的に動かせる部分(視線(◎)、口(◎)、頭部(◎)、寝返り(◎))	
	上・下肢の動き	上・下肢(手足を伸ばす(◎)、大きいボタンを押す(◎))、手の大まかな操作(押す(○)、握る(○)、離す(○)、つかむ(○)、引っ張る(○))	
	手指の巧緻性	指の操作(つかむ()、指先で押す())、指の細かな操作(小さな物をつまむ()、ボタン操作())	
指導の展開を工夫するための観点 コミュニケーション面	選択	快・不快の表出をする(◎)、二つの中から一つを選ぶ(○)、三つ以上の中から一つを選ぶ(○)	
	要求	物の要求をする(○)、活動の要求をする(○)、許可の要求をする()、援助の要求をする()	
	相互伝達	あいさつ・応答をする(○)、質問・返答をする()、会話をする()	
	場面における受信・発信の状況	個別	身近な相手/慣れている場面(◎)
		集団	友達/集団活動場面(◎)
		校外	初対面の相手/慣れていない場面(○)

チェック ◎…確実にできるもの
○…確実ではないができるもの

	認知・言語理解面			スイッチ・入力装置
	感覚刺激への反応 抱っこ、揺さぶり、表情、まなざし、身振り	具体物・半具体物の理解 実物、写真、絵、シンボル、サイン	文字言語の理解 ひらがな、漢字交じり文	
身体の様子	OPC ・Pressto Playシリーズ VOCA ・ビックマック ・トーキングパディ ・フルムントーカー ○環境制御装置	OPC ・アイコンコミュニケーションボード VOCA ・ビックステップバイステップ ○コミュニケーションボード ・視線コミュニケーションボード	OPC ・トーキングパートナー VOCA ・ステップバイステップWithレベル ○コミュニケーションボード ・50音表 ・単語表	音響スイッチ 呼吸スイッチ まばたきスイッチ 眨眼スイッチ
運動・動作面	OPC ・ぼんぼんランド~ense mble~ VOCA ・リトルマック ・アイトーク ・パートナーワン	OPC ・コトバックス VOCA ・ゴートーク4 ○写真、絵、シンボルなどのカード ○ジェスチャー ○コンパートメントコミュニケーションボード	OPC ・ディスカバースイッチ VOCA ・レット・チャット ・VOCAフレックス2 ○文字盤	センサースイッチ プッシュスイッチ ブッシュスイッチ タッチスイッチ 構成員スイッチ ひもスイッチ トラックボール
手指の巧緻性	OPC ・ステップタッチ VOCA ・ウェストポーチメッセージ ・パートナーワン ○ボイスメモ	OPC ・ヒロキII VOCA ・メッセージメイト ・トータラックワイズレブル ○コミュニケーションブック	OPC ・ハーティラダー ・ディスカバーキネックス VOCA ・トーキングエイド ・ダイナモ ○筆談器	マウス タッチパネルディスプレイ 大型キーボード リモコン(大) 第二ボタ リモコン

【図6】「代替コミュニケーション手段選択表」(A児)

カラオケ遊びを取り入れ、写真を見て選択したときにはA児と一緒に活動を楽しむようにした。このことから、授業を進める際は、【図7】で示すように生徒が代替コミュニケーション手段を活用して確実に選択し、伝えることができるように四つの点から展開の工夫をした。

<p>○代替コミュニケーション手段の活用 代替コミュニケーション手段を活用できるように、写真の大きさやスイッチの形状・配置を工夫した。</p>	<p>○指導の段階 好きな活動や苦手な活動の写真を使い、視覚的な働きかけをとおして二つの活動の中から一つを選択できるように工夫した。</p>	<p>○指導の場面 集中して活動に取り組むことで代替コミュニケーション手段の使い方に慣れることができるように、一対一の学習場面を設定した。</p>	<p>○興味・関心 写真を見て選択をする場面では、好きな活動の写真と苦手な活動の写真を組み合わせることで、A児が選択しやすいように工夫した。</p>
--	---	--	---

【図7】指導の展開の工夫（A児）

以上のことから、A児の指導目標を「自分の好きな遊びを選択し、伝えることができる」として、【表9】のように指導計画を立てた。

【表9】指導計画（A児）

題材の目標		問いかけに対してリトルマックを使って答えることができる。		
各次の目標		各時の目標	学習活動	評価の観点
第一 次	一つの リトルマックを使うことに慣れ、二つの中から一つを選び、伝える。	第1時	リトルマックを押すことでカラオケができることが分かる。 カラオケ遊び 1 (1)マイクの写真を見てリトルマックを押す。 (2)カラオケをする。	リトルマックを押すことでカラオケができることが分かる。
		第2時	自分のやりたい活動の写真が呈示されたときだけリトルマックを押すことができる。 カラオケ遊び 2 (1)自分のやりたい活動の写真が呈示されたときだけリトルマックを押す。 (2)カラオケをする。	自分のやりたい活動の写真が呈示されたときだけリトルマックを押すことができる。
		第3時	好きな活動の写真が呈示されたときだけ「はい」のリトルマックを押すことができる。 トランポリン遊び (1)好きな活動の写真が呈示されたときだけ、「はい」のリトルマックを押す。 (2)トランポリンをする。	好きな活動の写真が呈示されたときだけ、「はい」のリトルマックを押すことができる。
第二 次	二つの リトルマックを使い二つの中から一つを確実に選び、伝えることができる。	第4時	好きな活動と苦手な活動の写真の組合せから好きな活動を選び、リトルマックを押すことができる。 選択遊び 1 (1)カラオケとペグさしの写真を順に見て、遊びたい方の写真が呈示されたときにリトルマックを押す。 (2)トランポリンとペグさしの写真を順に見て、遊びたい方の写真が呈示されたときにリトルマックを押す。	好きな活動と苦手な活動の写真の組合せから好きなものを選び、リトルマックを押すことができる。
		第5時	色々な組合せの中から好きな活動の一つを選び、リトルマックを押すことができる。 選択遊び 2 (1)2枚の好きな遊びの写真を順に見て、遊びたい方の写真が呈示されたときにリトルマックを押す。 (2)2枚の苦手な活動の写真を順に見て、遊びたい活動が無い場合にはリトルマックを押さない。	色々な組合せの中から好きな活動の一つを選び、リトルマックを押すことができる。
		第6時	二つの遊びの中から好きな遊びを確実に選び、伝えることができる。 遊びを選ぶ 1 (1)2枚の写真を順に見て、遊びたいときにリトルマックを押す。 (2)苦手な活動を選択したときにはもう一度同じ組合せで選択する。	苦手な活動を選択した後に、もう一度同じ組合せで選択することで、二つの遊びの中から好きな遊びを確実に選ぶことができる。
		第7時	二つの遊びの中から好きな遊びを確実に選び、伝えることができる。 遊びを選ぶ 2 2枚の写真を順に見て、遊びたいときにリトルマックを押す。	二つの遊びの中から好きな遊びを確実に選ぶことができる。
		第8時	2枚の写真を同時に見て好きな遊びを確実に選び、伝えることができる。 2枚の写真を同時に見て、遊びたい方のリトルマックを押す。	2枚の写真を同時に見て、好きな方の遊びを確実に選ぶことができる。

(エ) A児の授業実践の記録（第8時）

第8時の授業実践の記録を【表10】に示す。

【表10】第8時の授業実践の記録（A児）

学習活動	研究担当者の働きかけ	A児の活動の様子	展開の工夫
導 入 (15分)	あいさつ	・研究担当者の声に併せて声を出す。	○代替コミュニケーション手段の活用 ・見やすい大きさの写真を準備する。
	本時の学習	・CDラジカセの写真を見て「アー」とカラオケのときの歌声を出す。 ・トランボリンの写真を見て、研究担当者の「やりますか」との問いかけに「あい」という声で答える。	
	体操	・マット上に横になるとCDに向かってはっていく。 ・体操中にマッサージのリズムに合わせて「ウイウイウイ」と声を出す。 ・キャッチボールを楽しむ。	
展 開 (20分)	1回目 ㊦訓練器 ㊦ブランコ	・ブランコの写真を触り、ブランコの写真の下のスイッチを押す。	○代替コミュニケーション手段の活用 ・リトルマックにブッシュスイッチを接続し、スイッチが動かないように固定することで、A児が押しやすいように工夫する。 ・二つのブッシュスイッチの色を青と黄にし、2枚の写真のすぐ下にスイッチを配置する。 ○指導の段階 ・二つの活動から好きな活動を確実に選ぶことができるように、写真を使った視覚的な働きかけによる選択を指導内容とする。 ○指導の場面 ・集中して活動に取り組むことができるように、一对一の学習場面を設定する。 ○興味・関心 ・集中を継続することができる時間を配慮し、活動を20分に設定する。 ・A児の興味・関心に応じて、活動内容を設定する。
	2回目 ㊦カラオケ ㊦ペグさし	・ペグさしのスイッチを押す。 ・カラオケの写真を触る。	
	3回目 ㊦トランボリン ㊦カラオケ	・カラオケのスイッチを押すが、続いてトランボリンのスイッチも押す。 ・カラオケの写真を触る。	
	4回目 ㊦カラオケ ㊦ペグさし	・カラオケのスイッチを押し、カラオケをしながら声を上げて喜ぶ。	
	5回目 ㊦訓練器 ㊦トランボリン	・トランボリンの写真に触った後、写真の下のスイッチを押し、研究担当者と一緒にうれしそうにトランボリンをする。	
	6回目 ㊦ブランコ ㊦カラオケ	・ブランコのスイッチを押して、ブランコを楽しむ。 ・うれしそうに「アーアー」と声を上げる。	
	7回目 ㊦ペグさし ㊦トランボリン	・ペグさしの写真を触り、スイッチを押す。 ・あまり楽しそうではない様子でペグさしをする。	
	8回目 ㊦ペグさし ㊦トランボリン	・トランボリンの写真を触り、スイッチを押す。 ・声を上げてトランボリンを楽しむ。	
	9回目 ㊦ブランコ ㊦ペグさし	・ブランコのスイッチを押す。 ・うれしそうに声を上げてブランコを楽しむ。	
	10回目 ㊦カラオケ ㊦トランボリン	・カラオケのスイッチを押す。 ・マイクを研究担当者と交換し合い、一緒にカラオケを楽しむ。	
(中略)			
ま と め (15分)	16回目 ㊦ブランコ ㊦カラオケ	・ブランコのスイッチを押す。 ・大きな声を出して、ブランコを楽しむ。	
	体操	・CDラジカセに向かっていき研究担当者と一緒にスタートのスイッチを押す。 ・気持ちよさそうにマッサージを受ける。	
	まとめ	・「うん」と言い、うなずいた後、「まんま」と言う。 ・「うん」と返事をする。	
あいさつ	・手を握ってタイミングを合わせて一緒に声を出す。	・研究担当者の発声に併せて、「オイオイオイ」と声を出す。	

(ウ) 授業実践におけるA児の活動の様子

授業実践におけるA児の活動の様子を【表11】に示す。

【表11】 授業実践におけるA児の活動の様子

次	時	授業実践の概要		活動の様子	活動の分析
		学習活動	展開の工夫		
一 次	第1時	マイクの写真を見てリトルマックを押す。 リトルマックを使うことが要求につながる事が分かるように、マイクの写真を見てリトルマックを押したときにはA児の好きなカラオケ遊びをする。		<ul style="list-style-type: none"> リトルマックを押すと声が出ることに興味をもち、何度もリトルマックを押した。 写真をよく見ないでリトルマックを押したり、直接写真に手を伸ばしたりする様子が見られた。 リトルマックを押した後のカラオケ遊びを楽しむことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> リトルマックを何度も押した様子から、リトルマックを使うことが要求を伝えることにつながることを把握できていないと思われる。 写真をよく見ようとしないことから、写真を見て遊びの内容を理解することが十分ではないと思われる。 カラオケ遊びを楽しむことができたのは、自分でリトルマックを押したことにより好きな遊びができたためであると思われる。
	第2時	自分のやりたい活動の写真が提示されたときだけリトルマックを押す。 写真を手がかりに遊びを選択できるように、2枚の写真を順に見せて遊びの内容を把握させる。		<ul style="list-style-type: none"> 好きな活動の写真を提示したとき、苦手な活動の写真を提示したときのどちらもリトルマックを押した。 授業の後半に苦手な活動（ペグさし）の写真を手で押しつけるしぐさが見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> どちらの写真を見てリトルマックを押したことから、写真を見て遊びの内容の違いを理解することがまだ十分ではないと思われる。 授業の後半、一度であるがペグさしの写真を手で押しつけたことから、写真を見て判断しようとする気持ちが芽生えてきたものと思われる。
	第3時	好きな活動の写真正が提示されたときだけ、「はい」のリトルマックを押す。 「はい」と「いやだ」の対象となっているものを判断し押すことができるように、二つのリトルマックを使う。		<ul style="list-style-type: none"> 授業の中で研究担当者の顔を引き寄せ、笑う様子が見られた。 遊びの写真を見て、二つのリトルマック（「はい」「いやだ」）からどちらかを選ぶ内容に取り組んだが、どちらのリトルマックを押せば良いのかとまどう様子が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> リラックスした様子が見られたことから、徐々に緊張を取り除き授業に参加できるようになったものと思われる。 どちらのリトルマックを押していいのか迷う姿が見られたことから、「はい」と「いやだ」の対象となっているものを判断し押すことは難しかったと考えられる。
第 二 次	第4時	好きな活動と苦手な活動の写真を順に見て、遊びたい方の写真が提示されたときにリトルマックを押す。 リトルマックを押す・押さないことで選択できるように2枚の写真を順に提示する。		<ul style="list-style-type: none"> 後半の3回の試行では苦手な活動の写真を見ても自ら首を振ってリトルマックを押さずに、次に提示したトランポリンの写真を見てリトルマックを押すことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中で繰り返し選択に取り組んだ結果、何度か好きな活動を選択することができた。これまでは、好きな活動も苦手な活動も目の前にリトルマックと写真を提示すると必ず押していたことから、リトルマックを使って伝えるという授業の流れが分かり始めてきたものと思われる。
	第5時	色々な組合せの中から好きな活動一つを選び、リトルマックを押す。 2枚の写真を見て確実に選択できるように、写真の組合せを色々変えて提示してみる。		<ul style="list-style-type: none"> 写真提示を、苦手な活動→好きな活動の順番で提示した場合6回の取組のうち2回の取組において、苦手な活動の提示を受けてもリトルマックを押さずに、次の好きな活動の写真を見てからリトルマックを押すことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 2回ではあるが、写真を手がかりとしてA児が確実に選択し自分のやりたい遊びをリトルマックで伝えることができた。リトルマックの使い方も指導当初のようなバンバンとたく様子も少なくなってきた。このことから、写真を見て選択したことをリトルマックで伝えることに慣れてきたものと思われる。
	第6時	2枚の写真を順に見て、遊びたいときにリトルマックを押す。 写真を見て確実に選択できるように、苦手な活動を選択したときにはもう一度同じ組合せで選択させる。		<ul style="list-style-type: none"> 苦手な活動を選択し、もう一度同じ組合せで選択を試みたのは3回あった。その後、もう一度同じ組合せで取り組んだところ、1回好きな活動を選択できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 苦手な活動を選択したときに、もう一度同じ組合せで選択を行うと、好きな活動を1回ではあったが選択できた。このことから、同じ組合せで選択を行う際、苦手な活動を選ばないように、よく写真を見ようとする気持ちが芽生えてきたものと思われる。
	第7時	2枚の写真を順に見て、遊びたいときにリトルマックを押す。 写真を見て確実に選択できるように、苦手な活動を選択したときにはもう一度同じ組合せで選択させる。		<ul style="list-style-type: none"> 苦手な活動を選択し、もう一度同じ組合せで選択を試みたのは4回あった。その後、もう一度同じ組合せで取り組んだが、苦手な活動の写真を見てリトルマックに手を伸ばそうとし、なかなか好きな活動を選択することができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 苦手な活動を選択した後は、同じ組合せでもう一度選択をさせることで好きな活動を選択できるものと考えていたが、なかなか好きな活動を選択することができなかった。このことから、次回の指導では写真の提示の仕方を変えてみる必要があると思われる。
第8時	2枚の写真を同時に見て、遊びたい方のリトルマックを押す。 リトルマックを押すことで選択を伝えられるように、2枚の写真の下にリトルマックを配置する。		<ul style="list-style-type: none"> 好きな活動と苦手な活動を並べて提示し、それぞれの写真の下にリトルマックを配置したところ、ほとんどの取組で好きな活動を選択し伝えることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 写真を並べて同時に提示したことで好きな遊びを選択することができた。これは、写真を同時に提示することが二つの活動を比較し選択する上で有効であったからだと思う。このことから、今後、写真提示の仕方を工夫することで、写真を代替コミュニケーション手段として活用することができるのではないかとと思われる。 	

(カ) A児のコミュニケーション能力の育成状況

① 受信・発信する力の育成状況

A児は、興味・関心のある言葉を理解することができるが、そうでないものについては理解することが難しく、視覚的な働きかけをとおして内容の理解を促す必要があった。そこで、写真を「受信を補助する手段」として使い選択を行う学習活動に取り入れた。第1時と第2時の活動で

は、写真に注目しようとせずにリトルマックを押したり、好きな活動の写真を見ても苦手な活動の写真を見ても必ずリトルマックを押したりするなど、写真を「受信を補助する手段」として使うことを理解できていない様子が見られた。しかし、第4時以降数回ではあるが苦手な活動の写真を見ると、自ら首を振ってリトルマックを押さない様子が見られるようになった。これは、A児が写真を見て何をすればよいのか学習活動を分かり始めたものと考えられる。このことから、今後、A児に対してコミュニケーションの指導を行う際、写真や絵カードなど視覚的に働きかけることのできる手段を活用して指導の展開を工夫することによって受信する力を育成することができると考える。

また、A児は直接実物に手を伸ばすことで要求を伝えるため、近くに要求する実物が無い状況で相手に伝達することの困難さを抱えていた。そこで、A児が実物が無くともVOC Aを使うことで音声によって要求を伝えることができるように、リトルマックを「発信を補助する手段」として選択し授業実践を行った。第1時と第2時の活動では、何度もリトルマックを押して表出される音声を聞いて楽しんだり、好きな活動の写真を直接手で触ったり、苦手な活動の写真を手で押し分けたりするなど、リトルマックを「発信を補助する手段」としてとらえていない様子が見られた。しかし、リトルマックを押したときに呈示された写真と同じ活動をするという経験を重ねた結果、苦手な活動の写真の際には研究担当者の声がけに首を振ってリトルマックに手を伸ばそうとしない様子が見られるようになった。これは、A児が示された写真の内容とリトルマックを結び付けて考え始めたものと思われる。このことから、A児がリトルマックを活用したことにより発信する力が育成されつつあると考える。

② 相手や場面に応じてかかわる力の育成状況

授業実践を始めた当初は、研究担当者とは初めての授業ということもあり、担任の教師とかかわるときのような表情や大きな笑い声が少なく、緊張している様子がうかがえた。そこで、A児が興味・関心のあるカラオケやブランコ、トランポリンなどの遊び、ボール投げやリラックス体操などの活動を取り入れ、A児ができるだけ緊張を取り除き楽しく授業に参加できるように指導内容を工夫した。また、A児が好きな活動を選択できたときには研究担当者も一緒に活動を楽しむようにするなど、A児とのかかわり方にも配慮し授業実践に取り組んだ。授業実践が進むにつれて、A児がうれしそうな表情で研究担当者の顔を手で引き寄せようとしたり、好きな活動をしながら研究担当者と一緒に大きな声で笑い合ったりする姿が見られるようになった。これは、A児の興味・関心に応じた指導内容の設定やかかわり方への配慮がA児の緊張を取り除くことに有効であったからだと考える。このことから、A児の興味・関心に応じた指導内容の工夫やかかわり方の配慮など指導の展開を工夫したことにより、相手や場面に応じてかかわる力を育成することができたものと考えられる。

③ 実践後の担任の感想から

A児の担任からは、「A児が好きな活動を選択し研究担当者に伝えるに当たって、写真やリトルマックなどの代替コミュニケーション手段を活用するにはまだ至っていないように感じる。しかし、授業実践を重ねていく中で徐々に写真を見て選択しようとする様子やリトルマックを使い伝えようとする様子が感じられた。」との感想をいただいた。これは、今回の実践をとおして、A児が好きな活動を選択し、伝える際に代替コミュニケーション手段を意識するようになったからと考える。また、「今後、余暇の場面において好きな遊びを伝えることにつながりそうだ。」との感想もいただいている。このことから、今後、コミュニケーション能力を育む指導の中で、写真やリトルマックなどの代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開を工夫することによって、A児の「受信・発信する力」や「相手や場面に応じてかかわる力」を育むことができるのではないかと考える。

イ B児の授業実践及び実践結果の分析と考察

(ア) 「実態把握のためのシート」の活用

「実態把握のためのシート」

を活用した結果は、【表12】に示すとおりである。

(イ) 「代替コミュニケーション手段選択表」の活用

「実態把握のためのシート」に基づいて、B児の代替コミュニケーション手段の選択を行った。B児の実態から「周囲の人とお互いの考えや気持ちを文章や言葉で伝え合うこと」が大切ではないかと考え、B児の考えられる代替コミュニケーション手段を【図8】に示す部分からハーティラダー（文章作成支援ソフト）と、トーキングエイド（50音キーを押すことでメッセージを作成できる音声代替装置）を選択し、スイッチ・入力装置はマウスを選択した。

(ウ) B児の指導計画

「実態把握のためのシート」に基づいて、B児の代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開の工夫を行った。

「実態把握のためのシート」より、相互伝達の際には応答的なかわりが多いとのことから自発的なやりとりができるようになることをねらいとして設定した。また、コミュニケーションの広がりや考慮し、指導場面は個別と校外とした。展開するための工夫としては、B児の興味・関心から身近な教師や友達との間での、会話、メール、手紙のやりとりを取り入れること

【表12】「実態把握のためのシート」（B児）

観 点	項 目 () 内にチェック◎/○	実態の状況		
代替コミュニケーション手段選択のための観点	認知・言語理解面	働きかけへの反応	感覚刺激に対する反応(抱っこ◎)、揺さぶり◎、表情◎、まなざし◎、身振り◎	感覚刺激に対して、身振りや表情で快・不快を表現できる。教師の表情や身振りを見て、意図をくむことができる。
		具体物・半具体物の理解	実物◎、写真◎、絵◎、シンボル◎、サイン◎	具体物・半具体物の理解ができる。
		文字言語の理解	ひらがな◎、漢字交じり文◎	理解できる。
		音声言語の理解	単語◎、二語文◎、会話◎	理解できる。
運動・動作面	身体の様子	微細な動き(筋肉◎、呼吸◎)、まばたき◎、目の動き◎、意図的に動かせる部分(視線◎、口◎、頭部◎)、寝返り◎	右側にまひがあるが、左半身は比較的自由に動かすことができる。	
	上・下肢の動き	上・下肢(手足を伸ばす◎)、大きいボタンを押す◎、手の大まかな操作(押す◎、握る◎、離す◎)、つかむ◎、引っ張る◎	おおむねの動作はできる。右手は強くまひがある。左手を使った活動が中心になる。	
	手指の巧緻性	指の操作(つまむ◎)、指先で押す◎、指の細かな操作(小さな物をつまむ◎)、ボタン操作()	左の手指は比較的自由に動かすことができる。つまむ、指先で押す動作を確実にではないができる。	
指導の展開を工夫するための観点	コミュニケーションの様子	選択	快・不快の表出をする◎、二つの中から一つを選ぶ◎、三つ以上の中から一つを選ぶ◎	視覚的な働きかけ、言語的な働きかけに身振りや言葉で答えることができる。
		要求	物の要求をする◎、活動の要求をする◎、許可の要求をする◎、援助の要求をする◎	トーキングエイドを使って要求を伝えることができる。
		相互伝達	あいさつ・応答をする◎、質問・返答をする◎、会話をする◎	トーキングエイドを使ってあいさつや返答、質問や応答などができる。人とのかわりが多い。
	場面における受信・発信の状況	個別	身近な相手/慣れている場面◎	身近な大人とのかわりを楽しむことができる。
集団	友達/集団活動場面◎	友達とのかわりを楽しむことができる。		
校外	初対面の相手/慣れていない場面◎	やりとりの経験が少ない。		

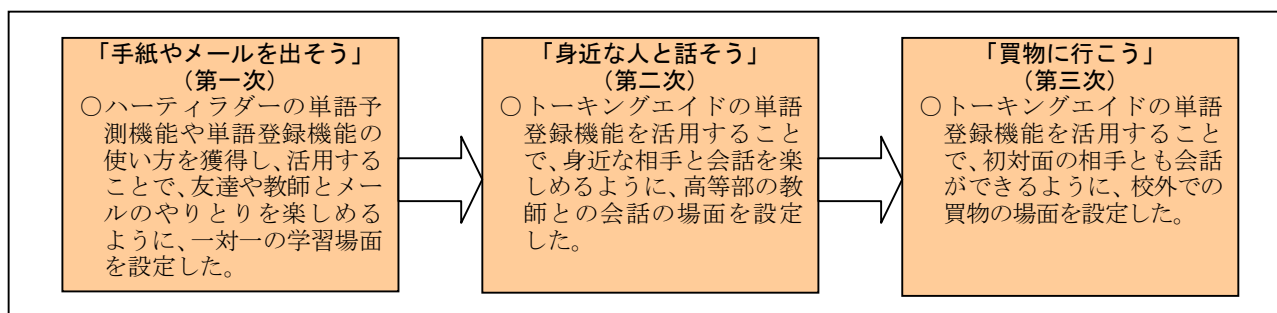
チェック ◎…確実にできるもの

○…確実にではないができるもの

	認知・言語理解面				スイッチ・入力装置
	働きかけへの反応	具体物・半具体物の理解	文字言語の理解		
身体の様子	抱っこ、揺さぶり、表情、まなざし、身振り ○PC ・Press to Playシリーズ ○VOCA ・ピクマック ・トーキングパディ ・フルムントーカー ○環境制御装置	実物、写真、絵、シンボル、サイン ○PC ・アイコンコミュニケーションター ○VOCA ・ピクステップバイステップ ○コミュニケーションボード ・視線コミュニケーションボード	ひらがな、漢字(交)り文 ○PC ・トーキングパートナー ○VOCA ・ステップバイステップWithレベル ○コミュニケーションボード		筋電スイッチ、呼吸スイッチ、おぼろスイッチ、聴覚スイッチ
運動・動作面	手を伸ばす、大きいボタンを押す ○PC ・ぼんぼんランド~ense ○VOCA ・リトルマック ・アイトーク ・パートナー/ワン	○PC ・コトボックス ○VOCA ・ゴートーク4 ○写真、絵、シンボルなどのカード ○ジェスチャー ○コンパートメントコミュニケーションター	○PC ・ディスカバースイッチ ○VOCA ・レット・チャット ・VOCAフレックス2 ○文字盤		センサースイッチ、プッシュスイッチ、マウス
手指の巧緻性	つまむ、指先で押す ○PC ・ステップタッチ ○VOCA ・ウェストポーチメッセージ ・パートナー/ワン ○ボイスメモ	○PC ・ヒロキII ○VOCA ・メッセージメイト ・トラクトラックワイズレベル ○コミュニケーションブック	○PC ・ハーティラダー ・ディスカバーキネックス ○VOCA ・トーキングエイド ・ダイアモ ○筆談器		マウス、タッチパネルディスプレイ、大型キーボード、リモコン(大)、キーボード、リモコン

【図8】「代替コミュニケーション手段選択表」（B児）

とした。授業を進める際には、【図9】で示すように代替コミュニケーション手段を活用しながら、身近な相手とのやりとりから初対面の相手とのやりとりへ発展できるように指導の展開を工夫した。



【図9】指導の展開の工夫（B児）

以上のことから、B児の指導目標を「周囲の人とお互いの考えや気持ちを文章や言葉で伝え合うこと」として、【表13】のように指導計画を立てた。

【表13】指導計画（B児）

題材の目標		①身近な人にトーキングエイドやハーティラダーを使って意思を伝えることができる。 ②トーキングエイドやハーティラダーの操作ができる。			
各次の目標		各時の目標	学習活動	評価の観点	
第一次	①ハーティラダーで簡単な手紙を書くことができる。 ②ハーティラダーの文字入力において、様々な機能を使った入力ができる。	第1時	①マウスを使った文字入力方法が分かる。 ②単語予測機能を使って簡単なしりとりゲームをすることができる。	しりとりゲーム (1)マウスを使った文字入力の仕方について知る。 (2)ハーティラダーでしりとりをする。	①マウスを使った文字入力の仕方が分かる。 ②単語予測機能を使って簡単なしりとりゲームをすることができる。
		第2時	①単語登録機能の使い方が分かる。 ②マウスを使った入力の仕方に慣れる。	手紙の作成 1 (1)単語を登録する。 (2)手紙を書く練習をする。	①単語登録機能の使い方が分かる。 ②マウスを使った入力の仕方に慣れることができる。
		第3時	①自分からマウスを使って入力することができる。 ②簡単な手紙を書くことができる。	手紙の作成 2 (1)手本を見ながら文例を登録する。 (2)簡単な手紙を書く。	①自分からマウスを使って入力することができる。 ②簡単な手紙を書くことができる。
		第4時	①メール機能を使うことができる。 ②友達にメールを出すことができる。	メールの作成 (1)メール機能について知る。 (2)友達にメールを出す。	①メール機能を使うことができる。 ②友達にメールを出すことができる。
第二次	①トーキングエイドを使って身近な人とやりとりができる。 ②トーキングエイドを使うことができる。	第5時	①トーキングエイドの単語登録機能を使うことができる。 ②行きたい場所や進みたい方向についてトーキングエイドを使って伝えることができる。	散歩 (1)行きたい場所や進みたい方向をトーキングエイドに登録する。 (2)散歩に出かける。	①トーキングエイドの単語登録機能を使うことができる。 ②行きたい場所や進みたい方向についてトーキングエイドを使って伝えることができる。
		第6時	①会話に必要な単語や文章を自ら考えトーキングエイドに登録することができる。 ②トーキングエイドに登録した単語や文章を用いて身近な人と会話をすることができる。	身近な人と会話 (1)会話に必要な単語や文章をトーキングエイドに登録する。 (2)身近な人と会話をする。	①会話に必要な単語や文章を自ら考えトーキングエイドに登録することができる。 ②トーキングエイドに登録した単語や文章を身近な人との会話の中で使うことができる。
第三次	①トーキングエイドを使い、初対面の相手ともやりとりができる。 ②トーキングエイドを校外の場面で使うことができる。	第7時	①トーキングエイドに登録した単語や文章を用いて、初対面の相手と会話をすることができる。 ②売店へ行き欲しい物を買うことができる。	買物をする (1)トーキングエイドにお店での会話に必要な言葉を登録する。 (2)売店へ行き欲しい物を買う。	①初対面の相手との会話において必要な単語や文章を自ら考えトーキングエイドに登録し、会話の中で用いることができる。 ②売店で欲しい物を買うことができる。

(エ) B児の授業実践の記録（第7時）

第7時の授業実践の記録を【表14】に示す。

【表14】第7時の授業実践の記録（B児）

	学習活動	研究担当者の働きかけ	B児の活動の様子	展開の工夫	
導	あいさつ	・「それでは、はじめのあいさつをしましょう」と言う。	・トーキングエイドを使い、あいさつをする。	<p>○代替コミュニケーション手段の活用</p> <p>・場面を想定させることで、会話に必要な言葉をトーキングエイドに登録させる。</p> <p>・状況に応じて登録した言葉を使ったり、言葉を入力し伝えたりするなど、トーキングエイドの機能を活用する。</p> <p>○指導の段階</p> <p>・学習の中に相互伝達的なやりとりを設定する。</p> <p>○指導の場面</p> <p>・初対面の相手とのかかわりを経験するために、校外の場面を設定する。</p> <p>○興味・関心</p> <p>・B児の欲しい物を買うことをねらいとして設定する。</p>	
入 (10分)	本時の学習	・「Bさんは、売店の人とお話をしたことがありますか」と聞く。 ・本時の学習について話す。	・手を振って「ない」を表現する。 ・研究担当者の話を聞きながら、うなずく。		
展	買い物に必要な単語や文章をトーキングエイドに登録する	・「はじめにお店に行って何を買うか決めたいと思います」と言う。 ・「じゃあ、お店に着いたら最初になんて言いますか」と聞く。 ・「いいですね、『おはようございます』とあいさつをしましょう、じゃあ、次はどんなことを話せばいいですか」と聞く。 ・「お店の人が『ありますよ』と言ったらなんと言えればいいですか」と言う。 ・「次にお店の人から『100円になります』と言われたらどうしますか」と言う。 ・「じゃあ、これまで登録した文章を使って、一度先生とシミュレーションをしてみましよう」と言う。 ・「それでは、早速、売店へ行ってみましょう」と言う。	・うなずき、トーキングエイドで『り・ん・ご・よ・ー・ぐ・る・と』と発声させる。 ・『おはようございます』という文章を、「お」の文字で登録する。 ・『りんごヨーグルトありますか』という文章を、「り」の文字で登録する。 ・『それを一つください』という文章を、「そ」の文字で登録する。 ・『後ろの袋におさいふ入っています』という文章を、「う」の文字で登録する。 ・お店の人とのやりとりを想定しながら、話の流れに応じて単語登録機能を使って、文章を発声させる。 ・うなずく。		
	お店の人と会話をする	・売店について、B児と一緒に店の中に入る。 ・お店の人：「おはようございます」と答える。 ・お店の人：「ごめんなさい。今日はりんごのヨーグルトが無いの」と言う。 ・お店の人：「はい、何個ですか」と聞く。 ・お店の人：アロエヨーグルトを持ってきて、「これでいいですか」と聞く。 ・お店の人：「75円ですよ」と言う。 ・お店の人：袋から財布を出してお金を受け取り、アロエヨーグルトをB児に手渡す。 ・お店の人：「はい、ありがとうございます」と言い、「今度はりんごヨーグルトを入れておきますからね」と言う。 ・教室へ移動する。	・自ら単語登録機能を使い「お」のボタンを押し、『おはようございます』と発声させる。 ・ほほ笑み、単語登録機能を使い「り」のボタンを押し、『りんごヨーグルトありますか』と発声させる。 ・他の商品の中からアロエヨーグルトを選び、トーキングエイドで『ア・ロ・エ・ヨ・ー・グ・ル・ト』と発声させる。 ・トーキングエイドで『1』と発声させる。 ・手を上げて「はい」と表現する。 ・単語登録機能を使い「う」のボタンを押し、『後ろの袋におさいふ入ってます』と発声させる。 ・単語登録機能を使い「あ」のボタンを押し、『ありがとう』と発声させる。 ・うれしそうにうなずく。		
	まとめ	・「今日は、お店でどんな言葉が必要か自分で考えて、登録してお店で使うことができましたね」と賞賛する。 ・「Bさん、今日はこれまで話したことの無い人ともトーキングエイドを使って話をすることができましたね」と言う。 ・「今日までパソコンやトーキングエイドを使って手紙やメールを出したり、会話をしたりしましたが、これからはいろいろな人とお話をしたり、買物をしたりすることができそうですか」と聞く。	・手を上げてうなずく。 ・手を上げてうなずく。 ・手を上げてうなずく。		
	ま と め (10分)	あいさつ	・「それではBさん、終わりのあいさつをしましょう」と言う。		・トーキングエイドを使って、『これで授業を終わります』と発声させる。

(ウ) 授業実践におけるB児の活動の様子

授業実践におけるB児の活動の様子を【表15】に示す。

【表15】 授業実践におけるB児の活動の様子

次	時	授業実践の概要		活動の様子	活動の分析
		学習活動	展開の工夫		
第一 次	第1時	①マウスを使った文字入力の仕方を知る。 ②ハーティラダーを使ってしりとりをする。 単語予測機能の使い方を獲得できるように、一対一の場面で機能を使ったしりとり遊びをする。		・しりとり遊びの場面ではハーティラダーの単語予測機能を使って6文字の単語を出力することができた。	・単語予測機能を使ったしりとり遊びでは、何度もこの機能を使い単語を出力していたことから、機能の利便性について理解できたものと考えられる。
	第2時	①ハーティラダーを使い単語を登録する。 ②手紙を書く練習をする。 単語登録機能の使い方を獲得できるように、一対一の場面で友達の名前を登録する。		・ハーティラダーの単語登録機能を使い、友達や教師の名前を登録することができた。 ・登録した名前を3回のクリック操作で出力し、「〇〇さんへ」という手紙の書き出しの文章に生かすことができた。	・B児が文章を作成する際、授業の前半に自分で登録した単語を使って文章作成に生かすことができた。このことから、B児は単語登録機能を必要に応じて使うことによって簡単に文章を作成できると感じられたものと思われる。
	第3時	①手本を見ながら文例を登録する。 ②簡単な手紙を書く。 ハーティラダーに登録した文例を活用できるように、友達や教師に手紙を出す。		・手紙でよく使用する文例について手本を呈示すると、5つの文例を登録することができた。簡単な手紙を書く場面では、登録した文例を出力させることで手紙を作成することができた。 ・文字の登録は難しかったかと問いかけたところ、手を振って「いいえ」と答えた。	・単語登録及び登録した文章の出力の際には、研究担当者が働きかけなくとも自ら機能を使い手紙を作成することができた。このことから、B児が学習で得た代替コミュニケーション手段の活用方法を有効であると感じ、自発的に使おうとしているものと思われる。
	第4時	①ハーティラダーのメール機能について知る。 ②友達にメールを出す。 これまで学習した様々な機能を応用し、メールを作成する際、必要な単語や文章を引き出して使うことができるようにする。		・メール機能について研究担当者が手順を示すと、真剣な表情で画面を見つめ手順を覚えようとする姿が見られた。 ・前回までの学習で登録した文字や文章を使いメールを作成し、友達や教師に3通のメールを送信することができた。	・メールの作成の際に、単語登録機能を使ってメールを作成し友達に送信することができた。このことから、登録機能の応用の仕方を理解できているものと考えられる。
第二 次	第5時	①行きたい場所や進みたい方向をトーキングエイドに登録する。 ②散歩に出かける。 トーキングエイドの登録機能を使い、考えや気持ちを相手に伝えることができるようにする。		・トーキングエイドに、右、左などの方向と噴水、郵便局などの行きたい場所を登録し、問いかけに応じて発声させながら散歩に行くことができた。	・授業後、B児から行きたい場所についてはトーキングエイドが便利であったが、進みたい方向については指差しや身振りなどの他のコミュニケーション手段を用いても良かったとの反省があった。このことから、状況に応じて代替コミュニケーション手段を選択し、活用することの必要性に気づくことができたものと思われる。
	第6時	①会話に必要な単語や文章をトーキングエイドに登録する。 ②身近な人と会話をする。 身近な相手との会話のときに必要な言葉を想定して登録し、会話に生かすことができるようにする。		・会話をしたい相手を決め、トーキングエイドに文章を登録することができた。 ・登録した文章を身近な教師との会話の中で生かし、会話を楽しむことができた。	・相手を想定して話題や内容を自ら考え伝えたいことをトーキングエイドに登録し、会話の中で使うことができた。このことから、今後、様々な場面においてトーキングエイドを活用し、コミュニケーションを広げることが可能であると思われる。
第三 次	第7時	①トーキングエイドにお店での会話に必要な言葉を登録する。 ②売店へ行き欲しい物を買う。 売店で何をかうか具体的なイメージをもたせ、購入するために必要な単語や文章を想定して登録し、会話に生かすことができるようにする。		・売店で欲しい物を購入するためやお店の人と会話するために必要な文章を自ら考え、トーキングエイドに登録することができた。 ・登録した文章を使ってお店の人と会話をし、欲しい物を購入することができた。	・登録したあいさつや文章を使って初対面の相手とも会話することができた。これは、B児が授業実践をとおしてトーキングエイドの活用方法を獲得できたものと考えられる。 ・「おはようございます」「ありがとうございます」などのあいさつを単語登録し、会話の中で表出することができた。これは、様々な相手とのやりとりを経験してきたことにより、日常的なあいさつを会話の中に盛り込むことの必要性に気づくことができたからであると思われる。

(カ) B児のコミュニケーション能力の育成状況

① 受信・発信する力の育成状況

B児は、障害の状態により、相手に伝えたいとの思いはあるものの、うまく伝えることができないという発信面での困難さを抱えていた。そこで、B児の考えや気持ちを文章や言葉で相手に

伝えることができるように「発信を補助する手段」としてハーティラダーとトーキングエイドを選択して授業実践を行った。ハーティラダーを使った授業実践では、B児がハーティラダーの単語予測機能や単語登録機能を活用することで文章をより簡易に作成できるように取り組んだ。加えて、B児が文字入力をする上での困難さを取り除くことができるようにマウスを使用した。ハーティラダーの単語予測機能や文章登録機能を活用したときの様子は、数回のマウスクリックで文章を入力し手紙やメールを送ることと、自ら考え登録した文章や単語を手紙やメールの作成に生かすことができている、文章作成やメールの作成において意欲的に取り組んでいた。また、マウス操作の方がキーボード入力のと比べ、画面上のポインタに注目しながら文字を選択することができ文字入力の際の誤字を減らすことができた。これは、B児がハーティラダーやマウスの活用することについて自分の考えや気持ちを文章にして伝えることに有効であると感じたためと考える。このことから、B児の発信する力が育成されたものとする。

また、トーキングエイドを使った授業実践では、会話場面を想定しながら自ら会話に必要な言葉をトーキングエイドに登録し、会話の中で登録した言葉を表出できるように取り組んだ。B児は「おはようございます」といったあいさつの言葉を登録したり、相手に応じて話しかける内容を考え登録したりするなどして、身近な相手や初対面の相手との会話の中で登録した内容を表出させ会話を成立させることができた。これは、B児が授業実践において様々な相手とトーキングエイドを活用した会話を経験する中で、トーキングエイドの登録機能が自分の思いを伝える上で有効であると感じたためであるとする。このことから、B児がトーキングエイドの機能を活用したことによって、発信する力が育成されたものとする。

② 相手や場面に応じてかかわる力の育成状況

これまでのB児の人とかかわる際の様子、相手からの働きかけに対しての応答的なかわり方が中心であり自発的に相手に働きかけようとすることは少なかった。そこで、自発的なかわりを願い、トーキングエイドの登録機能を活用する授業実践に取り組んだ結果、自らトーキングエイドの登録機能を活用し、様々な相手に対して話しかけようとする姿が見られた。また、授業実践を重ねる中で「おはようございます」や「ありがとうございます」などの日常的なあいさつをトーキングエイドに登録し会話の中で表出させたり、会話の流れを想定して登録する文章の数が増えたりするなどの様子が見られた。これは、B児が会話に必要な言葉を事前に登録し人とかかわりの中で生かすことの便利さや有効性を理解したことにより、様々な場面において活用しようという気持ちが芽生えてきたためと考える。このことから、B児の相手や場面に応じてかかわる力が育成されたものとする。

③ 実践後のアンケートから

実践後のアンケートでは、「ハーティラダーを使い文章を作成することは便利だと感じたか」との質問に対して「とても便利であると感じた」と回答していた。これは、B児が、ハーティラダーの様々な機能を活用することが文章作成をする上で有効であると感じたためと考える。また、「トーキングエイドの会話機能を使うことで会話を楽しむことができたか」との質問に対しては、「とても楽しかった」と回答していた。これは、B児が自ら考えた言葉をトーキングエイドに登録したことにより、身近な教師や初対面の相手との会話でもしっかりと思いを伝えることができたためであるとする。このことから、今後、B児が様々な相手や場面においてコミュニケーションを行う際、代替コミュニケーション手段を活用することによって自らの考えや気持ちを伝え

ることができるのではないかと考える。

④ 実践後の担任の感想から

B児の担任から、「B児が授業へ行くときにはハーティラダーやトーキングエイドを使った授業を楽しみにしているようであった。」との感想をいただいた。これは、B児がハーティラダーやトーキングエイドを活用し様々な相手や場面に応じてコミュニケーションを行う経験を重ねた結果、自らのコミュニケーション能力の高まりを感じることができたためと考える。また、7時間の授業実践をとおして代替コミュニケーション手段の様々な機能の使い方や入力の方法について説明や示範をすると、真剣な表情で研究担当者の声や動きをとらえようとする姿が見られた。これは、B児が代替コミュニケーション手段に対する価値観を高め、有効な手段であると認識し始めたからだと考える。

また、「これまでメールのやりとりは友達との間に限られていたが、実践後に自ら高等部の教師にメールを出すことができ喜んでいた。」との感想もいただいた。これは、B児が考えや気持ちを伝える経験をとおして身近な相手から初対面の相手まで自らコミュニケーションの相手を広げ、伝えたいという気持ちが芽生えてきたためと考える。このことから、B児の相手や場面に応じてかかわる力が育成されたものと考えられる。

5 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方のまとめ

これまで、手だての試案に基づく授業実践から明らかになったことは次のとおりである。

- (1) 「実態把握のためのシート」を作成し活用することによって、コミュニケーション能力を育む指導を行う上で必要な情報を得ることができた。
- (2) 「実態把握のためのシート」の観点と項目に対応した「代替コミュニケーション手段選択表」を作成し活用することによって、一人一人の生徒の実態に応じた代替コミュニケーション手段を選択することができた。
- (3) 一人一人に応じた代替コミュニケーション手段を活用し、指導の段階や指導の場面から具体的なねらいや活動場面を設定したり、生徒の興味・関心に応じて指導内容を設定したりするなど指導の展開を工夫することによって、生徒の受信・発信する力と相手や場面に応じてかかわる力を育む指導を進めることができた。
- (4) 2名の生徒に対しコミュニケーション能力の育成をねらいとして授業実践を行った結果、それぞれの生徒に代替コミュニケーション手段を活用しようという意識の芽生えを感じることができた。今後、更なるコミュニケーション能力の育成を目指して、代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開の工夫を継続していきたい。

以上のことから、生徒の実態を明らかにし、実態に応じた代替コミュニケーション手段を選択し、代替コミュニケーション手段を活用したコミュニケーション能力を育む指導の展開を工夫することは生徒のコミュニケーション能力を育む指導を行う上で効果があると考えられる。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本研究は、肢体不自由養護学校高等部の自立活動の時間において、一人一人に応じた代替コミュニケーション手段の活用をとおして、コミュニケーション能力を育む指導の在り方を明らかにし、

肢体不自由養護学校高等部の自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の充実に役立てようとするものである。そのために、肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する基本構想に基づき、一人一人の実態に応じて代替コミュニケーション手段を選択し、代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開を工夫するための手だての試案を作成し、授業実践をとおして手だての試案の有効性を検討してきた。その結果、成果として得られたことは次のとおりである。

(1) 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方に関する基本構想の立案

肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の基本的な考え方として、「コミュニケーション能力」を「受信・発信する力」と「相手や場面に応じてかかわる力」の二つにまとめた。また、文献を基に生徒の障害の特性を考慮した支援として代替コミュニケーション手段を活用することの意義を明らかにし、代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開を構想し、研究の基本構想を立案することができた。

(2) 基本構想に基づく実態調査及び調査結果の分析と考察

基本構想に基づき、代替コミュニケーション手段の活用を手だてとして取り入れるに当たり、調査対象となる生徒のコミュニケーションに関する指導の際の様子について実態を把握し、手だての試案作成にかかわる留意点を明らかにすることができた。

(3) 基本構想に基づく手だての試案作成

基本構想及び実態調査の結果から明らかになったことを踏まえて、コミュニケーション能力を育む指導において必要な実態把握の観点を設定し、一人一人に応じた代替コミュニケーション手段を選択することができる手だての試案を作成することができた。また、学習活動を展開するための手だてとして、生徒が代替コミュニケーション手段を活用できるように指導の段階や場面を設定することで、一人一人の実態に応じた指導の展開を工夫することができた。

(4) 授業実践及び実践結果の分析と考察

手だての試案に基づいて学習指導案を作成し、代替コミュニケーション手段を活用した授業実践を行いコミュニケーション能力の育成状況について分析と考察を行った。その結果、手だての試案が「受信・発信する力」「相手や場面に応じてかかわる力」の育成を図る上で有効であることが確認できた。

(5) 肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方についての研究のまとめ

肢体不自由養護学校高等部自立活動の時間におけるコミュニケーション能力を育む指導の在り方について、一人一人に応じた代替コミュニケーション手段の活用をとおして、成果と課題を明らかにすることができた。

2 今後の課題

この研究では、代替コミュニケーション手段の活用がコミュニケーション能力を育む指導において有効であることを明らかにすることができた。しかし、次の点については更に検討する必要があると思われる。

(1) 今後、各障害に応じた様々な代替コミュニケーション手段やコミュニケーションを支援する上で有効であろうと考えられる機器等についての情報を収集し、「代替コミュニケーション手段選

択表」の改良、検討を重ね、充実を図ること

- (2) 代替コミュニケーション手段を活用した指導の展開の工夫をする上で有効な手だてについて、今後、代替コミュニケーション手段を活用した授業実践を重ね、更に検討をすること

<おわりに>

長期研修の機会を与えてくださいました関係諸機関の各位並びに所属校の諸先生方と生徒のみなさんに心から感謝申し上げ、結びのことばといたします。

【引用文献】

- ・吉川知夫 (2004), 「肢体不自由養護学校の自立活動の時間におけるコミュニケーション支援機器の活用」, 『高度情報化社会における障害のある子どもの情報活用能力を育成する教育内容・方法に関する研究』, 国立特殊教育総合研究所, p. 41

【参考文献】

- ・香川邦生, 藤田和弘 (2000), 『自立活動の指導』, 教育出版
- ・こころリソースブック編集会 (2004), 『福祉情報技術 (e-A T) 製品ガイド』, こころリソースブック出版会
- ・小林重雄, 山本淳一, 加藤哲文 (1997), 『応用行動分析学入門』, 学苑社
- ・中邑賢龍 (1998), 『AAC入門』, こころリソースブック出版会
- ・西川公司 (2000), 『重複障害児の指導ハンドブック』, 全国心身障害児福祉財団

【参考URL】

- ・こころリソースブック編集会 こころ Web トップページ <http://www.kokoroweb.org/>